

論文題目 『中世和歌とその時代』

氏名 谷知子

本論文は、中世成立期の和歌文学について、とくに九条家という場に注目しながら、政治および信仰との関わりを重視しつつ、その特質を解明しようとするものである。まず序章において全体の構造と執筆意図を説明したあと、本論は五つの章から成る。

第一章「九条家と和歌」は最も中心となる章で、撰家である九条家の関わった場と、そこで生み出された和歌を主とする文学作品について論じる。まず法性寺が藤原忠通および良経にとって精神的隠遁の地であるとし(第一節)、また兼実の娘任子の入内に際して企画された『文治六年任子入内屏風和歌』が、屏風と和歌ともに兼実の理想とした世界を具現化していると説き(第二節)、ついで九条家の家記が歌学書的作用をも持ち、その家説が藤原定家の歌学にも摂取されているとする(第三節)。さらに第四節から第七節で、九条家および大懺法院で催された舍利講および舍利信仰の意義と和歌との関わりに大きく筆が割かれ、良経の公卿勅使体験に触れる第八節とともに、古代再生への意欲が現世的意味を持つことを指摘したうえで、それが新古今歌風とも関連すると論じる。

第二章「藤原良経と和歌」は、九条家のうち、とくに良経についての歌人論に四節を割り当て、いずれも良経の定数和歌を丁寧に読み解きながら、そこから吏隠同一を理想とする平安文人貴族の系譜に立つ、公私相反する二面性の存在などの特質を析出している。

第三章「歌ことばと中世の風景」は、新古今時代の和歌表現を正面に据えて論じる。第一節は「たのし」、第二節は「諸人」、第三節は玉葉風雅に継承された特異表現、第四節は消失を詠んだ和歌を、緻密に分析している。いずれも単なる語誌・語法ではなく、広い表現史的展望に立脚することによって、中世和歌固有の性格に触れている。

第四章「中世和歌と仏教」は、行尊の初度大峰修行の和歌(第一節)、六道の歌(第二節)、末法思想・辺土思想と中世和歌の関わり(第三節)を論じる。いずれも、仏教信仰と和歌が相互に意味付けあう中世和歌の特質を、具体的に分析している。

第五章「建礼門院右京大夫とその周辺」は、『建礼門院右京大夫集』(第一～四節)と『艶詞』(第五節)という二つの日記的私家集について、その成立の問題を中心に論じる。ともに全歌の注釈作業を基盤に新見を提示しつつ、中世初期の私家集の特質を指摘している。

本論文は、従来、表現研究、歴史的研究、思想的研究がそれぞれ別個になされていた感のある中世和歌研究に対して、九条家という場を中心としつつ、『新古今和歌集』を生み出した時代背景と和歌を総合しながら論じようとしている点に最大の特色がある。そしてどの論も、多くの創見を含む丁寧な作品読解に支えられているだけに、中世和歌研究の新たな方向性を説得力に富んだ形で示したものと評価することができる。

本論文は、題目に比して中世後期の和歌への言及に乏しく、また第五章など構成にやや統一感を欠くなどの難点もあるが、本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士(文学)に十分値するとの結論に至った。